追憶

素木しづ

青空文庫

また秋になつて、まち子夫婦は去年とおなじやうに子供の寢てる時の食後などは、しみ／〳〵と故郷の追憶にふけるのであつた。

今年もとう／〳〵行かれなかつたと、お互に思ひながらも、それがさしてものなげきでなく、二人の心にはまた來年こそはといふ希望が思浮んでゐるのであつた。

まち子の夫の末男は、偶然にも彼女とおなじ北海道に生れた男であつた。彼女はそれを不思議な奇遇のやうに喜んだ。そしてお互に東京に出て來たことが殆どおなじ位の時で、彼女の方が少し早い位のものであつた。しかもクリスチヤンの彼女の夫が、まち子も日曜ごとに通つてゐた札幌のおなじある教會に、熱心に通つてたことなどがわかると、彼女はなんだか、とりかへしのつかない殘念なことをしたやうに思はれて、ならなかつた。

『どうしてお互にわからなかつたんでせうね』

と、彼女はいつも、その頃の自分の樣子やいろ／〳〵こまかい出來ごとまで思浮べながら云つた。もはや、八年ばかり前のことである、まち子は、まだ赤色のリボンをかけた少女ですこやかに自由な身體で、いま現在のやうな未來の來ることなどは、夢にも思ふことなくクローバーの原や、廣い大道を飛びはねてゐたのであつた。

『私は、小さい時運動家だつたのよ。』

まち子は、そんなことを訴へるやうに夫に云つた。彼女は、自分のすこやかな、乙女の時の

輕やかな、快活な姿を夫に見せることが出來ないのを、淋しいことのやうに一人で考へた。そして、それがなんとなく彼に對して氣の毒な、彼女の一生を通じてすまないことのやうに、思はれるのであつた。まち子は、もはや不自由の足の惡い、自分の肉體についてはあきらめてゐる。勿論、彼女の夫は、彼女以上、あきらめてゐるに違ひない。彼は、松葉杖にすがつた、淋しい乙女であつた彼女あはれな妻である彼女よりも、知らないのであつたから。——けれども、それが彼女には、なんとなく、情けないやうな氣がするのであつた。

　自分の夫は、その頃どんな樣子をしてゐたらう。もしもその時から二人が知り合になつてゐたならば、どうなつたらう。やはり夫婦になつたであらうか。それとも、かつて知つてた人として思出すこともなくお互に忘られてゐたかもしれない。そして、またもしも電車で、お互に東京に來てゐたならば、顏を合せるやうなこともあるかもしれない。

　まち子は、そんなことをよく考へることがある。考へれば考へるほど、二人が夫婦になつてゐるといふ事も、不思議であれば、時の中にこうして生活してゐるといふことも、不思議になる。本當に考へて見れば、一寸した機會、また一秒間の時の爲めに、未來のどんな運命が湧き出ないともかぎらないのだ。

　私が病氣して海岸に行かなかつたならば海岸に行つて宿の窓から、海の方を見てゐなかつたならば——、彼女は末男と夫婦にならずに、見ず知らずの人として終つたかもしれない。最も親しい人となるといふことも、見ず知らずの人として終ることも、大した變化がないのだ、と

思ふと、まち子はなんとなく、すべてがつまらないやうな氣がして來るのであつた。

『もしも、その頃二人が教會に知り合になつてゐたらどうなつたでせうね。』

『お前が、十四五位の頃だらう。』

『えゝ。』

彼女は、眞面目な顏をして、うなづいた。

『じや、お互に戀したね。きつと。』

二人は、そんな話しをして、つまらなそうに笑つた。そして、なんとなく秋らしい空のいろと、着物の肌ざわりとに氣がつくと、やはり二人は堪えがたいやうに故郷の自然を思浮べるのであつた。そして、しばらく物をも云はずに考へ込んだやうにしてゐると、急に日が短かくなつたやうに、開けはなしてある椽の方からうす暗い影が見え初めるのであつた。

けれども、まち子はそれをかへり見やうともせずに、

『私、北海道に行つても、誰れにも知つた人に逢はふとは思ひませんわ。私はたゞそつと自分が前に殘した足跡を、車の幌の間からでも見てくれゝばいゝんですもの。それでも、私、どんなに悲しいことだらうと思ひますわ。只ね、そう考へるだけでも、涙が出そうなんですもの。藻岩山が紫色になつて見えるだらうと思ひますの、いま頃はね、そして落葉松の葉が黃色くなつて、もう落ちかけてる時ですわね。私あの、藻岩山に三度も登つたことがあるんですわ。』

まち子は、目の前に、すべての景色が見えでもするかのやうに、一心になつて涙ぐみながら

云ふのであつた。すると、末男も、おなじやうに、

『俺だつて、誰れにも逢はふとは思はない、只あの石狩原野だの、高原の落日、白樺の林なにを考へてもいゝなあ——それに五月頃になるとあの白樺の根に、紫色の小さいかたくりの花が咲くなんていふことを考へると、全くたまらない。來年こそは、どうしても行つて見やう。』

『本當にね、どうにかして行つて見ませうね。私は、ステイションについたらすぐに、車でお父樣のお墓參りに行かうと思ひますわ。創生川ぶちから豐平橋を渡つて行くんですわ。あなたも、一所に行つて下すつて。』

『ううむ、行くさ。』

末男は、無雜作に答えて、

『俺も、あの市來知にある、野菊の咲いてる母親の墓にだけは行きたいと思つてゐる。本當に市來知はいゝ所だからなあ。』

彼は、彼自身の足跡をふりかへつて靜かに嘆息するやうに云つた。

二人のこんな話しは、いつまでたつてもつきなかつた、彼女の云ふ山や川や木が、彼の眼にすぐに感じられ。彼のいふ空や草や建物は、彼女の心にすぐ氣づいて思浮べることが出來るからであつた。もしも二人がはなればなれの見も知らない土地に生ひ立つたとしたらどうであつたらう。まち子は、そんな事を、またふと考へると、幸福なやうな氣がすることもあつた。

そんな事を、あまり熱心に、そして感傷的に話し合つたのちは、二人とも過去の山や川に

その心を吸いとられたやうに、ぽかんとしてゐた。お互になんとなくつまらない、とりとめもない不安と遣瀬なさが、空虚な心を包んでゐるやうであつた。二人は家にゐることが淋しく、夜になつて寝ることがものたりなかつた。

『外に出てみないか。』

『えゝ、家にゐてもつまらないわね。』

そして彼と彼女とは、子供を抱いて家を出るのであつた。けれども、どこと云つてあてもないので、二人はやはり電車にのつて銀座に出てしまつた。

末男は子供を抱きながら、まち子と一所に銀座の明るい飾窓の前に立つて、星の見える蒼空に、すき透るやうに見える柳の葉を見つめた。そして、しばらく自分だちとはかゝはりもなく、行來する人の足音を聞いてゐた。

『どうしませうね。』

やがて、まち子は立ちくたびれたやうに云ふと、末男は氣づいてあてもなく歩き出した。しかし足の惡いまち子は、すぐに疲れるので、やがて靜かなカフエーかレストランドに入らなければならなかつた。

二人は、子供を抱いて明るい通りから折れて、暗い道を歩いた。暗い所に來ても、銀座の明るみを歩く人の足音は聞えた。

『銀座はずゐぶん、いろんな人が歩いてゐさうだわね。』

まち子は、夫のあとから歩きながら、一人ごとのやうにきこえない位な聲で云つた。そして、あのぞろ〳〵と歩いてゐる人の一人一人の過去や現在、また未來のことを考へたらきつとお互になにかのつながりを持つてるに違いないといふやうな氣がした。

やがて二人は、あるレストランドの二階の一隅に腰をおろした。まち子は疲れた身體をそつと椅子にもたれて、靜かな下の道をのぞこふと窓をのぞくと、窓際に川柳の青白い細い葉が夜の空に美しくのびてた。

まち子は、いつまでもいつまでも誰も何も云はなかつたら、その青白い細い葉の川柳を見つめてゐたかもしれない。この川柳も古郷に多い。彼女は、それをじつと見つめてゐると、また昔處女であつた折に、病の爲めに常に淋しかつた自分の心を思出したのであつた。まち子の足は、十六の終り頃から人なみに座ることが出來なかつた。なんといふ病やらも知らない、度々病院に通つたけれども、いつも、おなじやうな漠然としたことばかり云はれて居る。身體が弱い爲めだから營養をよくすること、足の膝關節が痛かつたら罨法をするといふ事であつた。彼女は別に身體の元氣はかはらなかつたので、學校に通つて歸つて來ると一人で罨法をした。別に特別痛むわけでもなく外面からも右足の膝關節は、なんの異常もなかつたのであるけれども、自由に曲折が出來ない爲めに、學校では作法と體操を休まなければならなかつた。

けれどもまち子は必ずしも癒らないとは思はなかつた。そしてどうかして早くなほしたいと

いつも考へてた。そして自分の部屋に入ると、古びた青いビロードの椅子に腰をおろして、その膝をもんだり、痛さをこらへて少しでも折り曲げやうとしたり、または罷法してそっとのばしたり等した。そしてまち子は自分が何の爲めに、いつも知れずこんな足になったのだらうか、といふ事を考へてると、いつの間にか涙が浮んで來てならなかった。

まち子は、ふと昔のことを考へると、なんとなく自分の身が急にいとしいものゝやうに思はれて、そのいとしいものをかい抱くやうに身をすくめた。

まち子は、いつも窓に向いて椅子に腰をおろしてゐた。その四角な彼女が向いてる硝子窓からは、黄色い落葉松の林や、紫色の藻岩山が見えて、いつもまち子が腰をおろして涙ぐむ時は、黄昏の夕日のおちる時で硝子窓が赤くそまってゐた。まち子は、涙が浮んで來ると、そっと瞳を閉ぢた。そして、いつまでもじっとしてゐた。初めは、兄妹たちの聲が隣の室から聞えて來た。そして彼女は悲しかった。けれどもだんだん何も聞えなくなっていつの間にか彼女は、無にゐることを覺えるやうになったのであった。

まち子は、その時その足の爲めに未來がどうなるかとも考へなかった。自分がその足の爲めに世の中にどんな心持で生きなければならないかと、いふ事も考へなかった。只、その時知つたのは自分の心の自分の肉體の限りない淋しさであった。

自分の病氣はその後上京して、すぐに結核性の關節炎だといふ事がわかったのだと、まち子は、ふと夫の顔を見ながら考へた。その時、まち子はもはや起き上ることが出來なかった。

そして切斷して松葉杖をつく身になつたのである。まだ若い十八の年に、彼女は、淋しい昔戀しいやうな心持になつて、もしも自分が松葉杖をつかない壯健な女であつたならば、自分の運命はどうなつたであらうかと考へた。いまとおなじ生活をしてゐるであらうか。

『默つてゐるね。』と末男は退屈さうに云つた。

『えゝ。』と、まち子は笑ひながら答えたが、彼女は自分の昔淋しい少女時代のことは話さなかつた。そして氣がついたやうに、また窓の外をのぞいた。

青空文庫情報

底本：「保健　第一巻第四號」衞生新報社
　　1917（大正6）年11月1日発行
※句読点の訂正、注記は、句点の脱落が疑われるところに限りました。
※ルビの訂正は、作品内で付け方に食い違いのあるものに限りました。
入力：小林　徹
校正：富田倫生
2008年10月2日作成
2008年10月30日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

追憶

素木しづ

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/